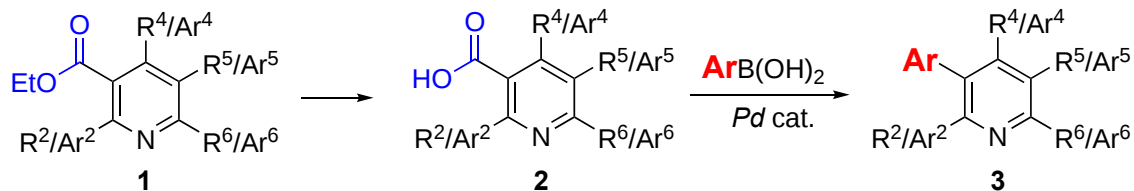


ピリジン環は反応性に乏しく、その修飾は困難であることが多い。当研究室では、電子密度に偏りを有するエナミノエステルと α,β -不飽和カルボニル化合物を塩化鉄の共存下で縮合させることにより多置換ニコチン酸エステルの合成を達成している。3 位のエステル官能基を他の置換基に変換することができれば、ピリジン環の望みの位置にアルキル基やアリール基を自在に導入することが可能になる。そのような背景の下、私は多置換ニコチン酸エステル **1** を前駆体を用いて多置換ピリジンの合成を検討した。



1 のエステルを加水分解して得られるニコチン酸 **2** に、Pd 触媒の存在下でボロン酸を作用させた。その結果、脱炭酸したピリジンも得られたものの、3 位にアリール基を導入することに成功した。本反応の特長は縮合させる原料を替えることにより環骨格の修飾が容易であることであり、本法を応用すれば、環骨格の自在修飾が可能になった。